

山と博物館

第12巻 第10号 1967年10月25日 大町山岳博物館



映画「ライチョウ」

アジア映画祭グランプリ受賞

十月五日、新聞発表によると映画特別天然記念物「ライチョウ」がアジア映画祭非劇映画部門の最優秀作品に選出されたことを知って感無量である。

この映画は時間にして三十分足らずの記録作品で私はその中数カットではあるが冬の雷鳥の生態撮影に参加したのでその時のことがまぶたに浮ぶ。その冬山を舞台にした場面では、云い尽せない冬山の素晴らしさの他一夜にして地形が変わり歩くという事さえ困難を極め、その上に雪崩の危険、寒さ。その行動には常に危険が付きまといましたものでした。そこに生きる白毛につままれた雷鳥の姿を見た時、しっと冬の厳しさに耐えてゆく力強さ、それが見事に大自然の中に調和された、神秘的な美しさが忘れられない。

冬の雷鳥を見た人は数少ないと思うが、雷鳥を見た人だけでも非常に価値があると一人思っている。「ライチョウ」のグランプリ受賞。このことは雷鳥の生態を追った、スタッフを始めこの映画に関係した人々には喜ばしい事である。限られた二、四〇〇米以上の高山帯でしか生活することができない雷鳥はその生活する環境は限られ、それに加えて天敵以外の人的な害に追われ生活を極端に苦しいものとしている。

永河期の遺物雷鳥、この貴重な鳥、雷鳥は絶対に絶やすことなく子孫に引きついで行かなければならない。その保護の為にこの映画を広く人々に見ていただき雷鳥の生活をより良く知ってもらう事が大切と思う。

人的な保護については多くの問題があるが是非ともしなければならぬ事であり、グランプリ受賞は雷鳥の価値ある記録に与えられたものと思う。これを一つのきっかけに雷鳥保護が一段と強化されることを切に願ってやまない。

(勝野直久)

北アルプスの想い出から

雷鳥カモシカコマクサー

村井米子

四季の雷鳥

雷鳥の居る飛騨山脈の片端に、はじめて私が登ったのは大正七年(一九一八)：もう五十年になる。半世紀の永い月日、折にふれ事にあたって、北アルプスの山々に親しんできたわが心を、自分ながらよくぞと想う。

木曾御嶽山に登って、田ノ原のあたりで深い霧に逢ったら、案内の先達が印を結んで歩

冬のライチョウ(オス)



き出したとき、私は白い小さい羽を見つけた
—何の羽かしら？
—ああ、お雷鳥さまの羽です。

これを見つけた方は運がいふと申します、大事にとってお置きなさい。

運の良し悪しなどには関心のない少女だった、ともあれ、生れてはじめての山の鳥、雷鳥の羽々という貴重品を、私はノートにはさみ、胸ポケットに大切に取めた。

何よりの登山記念と持ち帰って、文机の中に入れてから五十年、今も取り出して眺めていると、御嶽登山のむかしが生き生きと蘇ってくる。

その前年富士山に登って、一万尺の高山のよさに魅せられた私は、夏休みにぜひ山へ、と願っていた。幸いに父も木食研究に御嶽山へ行く、となった。知人の紹介で名古屋の先達に導かれ、木曾福島から私たちは歩き、父母は車で王滝まで行き、いよいよ登りにかかった。

木山五十町の木曾御料林の森林の、昼なお暗い壮厳さ：女学校四年の少女には重苦しいほどだったが、田ノ原へ出てバツと開けた高山の気の晴れやかさは、実に雄大、羽化登仙の歓びだった。と、やがて霧が寄せて白濤濤の天地：漢詩漢文で育った少女の心には、李白や杜甫の世界が再現する。

その、半ば仙人界へ登り入った夢心地に、ふと天から授けられた白い小羽は、先達が「お雷鳥さま」と称ぶのも、すらすらと反感なくうけ容れられた。神のお使いと貴んでいる信仰心：その零團気は当時のお山に溢れている。

た。九合目の小舎へ泊ったら、風雨を衝いて夜の頂上まで登った人々が、神様の御先導で足もとが明るく照らされ無事に参拝してきた：とか、途中でいく度も目にした神降しの術などは、少女心にもちと迷信めいて感じられはしたが：。ともあれ信仰の山のよさは、お山の草木や鳥を大切にしていることだった。先祖たちの、自然を保護する智慧かしら：。

雷鳥の群に出逢ったのはその翌年(一九一九)の立山弥陀ヶ原だった。雪溪と道松との間で遊んでいる親子に、ちっと見惚れた。去年(一九六六)十月半ば、草紅葉の室堂平から地獄谷への径では、七、八羽の群が居たバツと超つと、もうかなり白い羽と化し、まだほんの立山剣の稜線だけにしか雪が来ていないのに：早手廻しの、造化の神の冬仕度を察した。

その大正八年の立山は、上滝から歩きはじめ、芦くら寺を経て藤橋泊り、次の日に材木坂山毛樺坂と登って、弥陀ヶ原の広い広い雪渓と、高山植物をよるこびながら室堂着、二日がかかった。それが今はケーブルカー、バスと、ほんの富山から三時間で達する。むかし室堂からは神官の先導で、頂上の上ではワラジも脱いで裸足で登った私は、現在その頂上の真下にトンネルを掘っている実状を何と言っているか：言葉もない。

立山も、周辺の男子が十五才に達すると必ず登り、女人禁制の気分をつよい信仰の山であったのに、あまりに物質文明に冒されてしまった。

雷鳥たちよ、生きながらへよ：私は神のお使いと守っていた先人のこゝろに代るに、現代人の自然を愛護する科学よりの思想が、十二分に強くなつてほしいと願いながら、走り、舞い遊ぶ、親子の鳥を見守った。

まっ白い冬羽の雷鳥の大群に出逢ったのは三月下旬の後立山で、すでに報告したのが「雷鳥の生活」に載っている。春の彼岸休みを鹿島槍連峯へ志した私たちは、スキーで唐松

小舎のすぐ下まで登り、風雨の一日を小舎で過ぎた翌朝だった。
まっ青に晴れわたる雨後の大空の、まっ白い新雪の尾根を五龍山へと、アイゼンの踏みしめて辿った。大黒岳に来たのは九時頃だったろう、信州側の雪の上からバツと百羽位の白い鳥がたつて、すぐさきへ下りる。
—オヤ雷鳥よ！

—こんなに沢山々
突如、雪から湧いたように：それまで気づいてなかった私たちは、驚きかつ欲んだ。そつと邪魔せぬように移る：近づくとバツと舞っては少し先きに移る：また近づくと移る：皇居のお濠のかめめのように：雷鳥もやはり五龍岳へ向って、やがて信州側へ下りた。

大黒岳の飛騨側には、オオシラビンなど黒々と見えるから、その実でも食べて、こんなに多く集ったのか：思いながら五龍頂上まで登った。戻ってきた時は再び逢わなかった。そのときは、他に目もさめるような美しい鳥、まあ高麗キジに近いのが一羽、同じ辺りから空高く飛んで行った。心がけているが、その後の山で再び出逢わぬ、私のまぼろしの鳥だ。

春の雷鳥には、白馬の乗鞍岳と大池辺りでいくども出逢った。早稲田の神ノ田甫の小舎や、桐池小舎を足場の春スキーのたのしさは、四月末から五月初め、すぐに稜線まで登れる幸がある。小蓮華や大蓮華までのすとのガツツキ組を送って、のんびりと春日を浴び、白馬連嶺と大雪溪との展望に恍惚とする：乗鞍の肩の大きい岩に、見よ雷鳥か、二羽三羽。
もう白の冬羽に、黒がくつきり目立つ姿で

いつも同じ岩のあたりで出たから、その辺が棲みよいのだろう。秋のは白が印象的だけれど、春のは黒が目立ったのは、見る者の心のゆえか：。

三月にも登ったが、その時は逢えず、また大正年代には、大雪溪から白馬頂上に登った

春もあるが、そちらでも見なかった。少女の日にひろった一枚の小羽の縁か、人知れず親しみを抱く北アルプスの雷鳥に、いつしか春夏秋冬の四季、それぞれ逢えたのも、運がよかつたしるしかもしれない。

：霞沢岳のかもしか：

「かもしか」に近々と出逢ったのは、霞沢岳の上である。上高地は、大正九年(一九二〇)夏、まだ神河内と書くにふさわしい神秘境にとりつかれ、一週間ばかりキャンプしてから次の大正十年も大正十一年も、夏休みを待ちかねて徳本峠を越えた。七月から九月まで、キャンプ生活をしながら、夏休みの読書と山歩き、大正十二年には、穂高槍籠走を果して、女性最初と言われたほど親しんだ私だ。

ところが霞沢から六百へと登ったのは、もう昭和に入ってからだった。病後の幼い娘を連れていた私は、長い山歩きから帰った連れにその娘を托し、一日だけ自由にさせて貰った。昔馴染の上高地の主、常さん(内野常次郎)のおいの山男、飛騨中尾の中島政太郎さんを案内に、ザイルと弁当の軽装で、放たれた鳥のころ：嬉々と霞沢の本谷に向った。

何十日の明暮れ、眺め楽しんでこの谷の上に、三本槍という岩場がある。本谷から左へ曲ると、すぐ壁になって、しかもザラザラと脆い岩質がくづれ易く、ひどく仕末が悪い。ザイルはあったが、ピトンだの梯子だの、まだそんな用具は使わぬ時代だが、中島さんは岩登りの名人だ。私は言われる通り、岩に大の字に張りついたり、わづかの手がかりや足場にすがって、引き上げてもらった。

三本槍は、名の如く三本の槍がっつらなあって、上高地溪にのぞんでいる。鋭い岩峰にまたがって、眼下を見ると、梓川の碧の流の向うに、清水屋(今の温泉ホテルの処)がポツンとある。そこに泊っている連れが、見上げていれば解るだろうと、白い帽子をふって登頂を告げた。

「ここは男の学生もまだ幾らも登ってない



カモシカ(兔子)

ずら：

中島さんに賞められながら、岩峰を過ぎて山頂へ出ると、思いがけない平ら：パツと二頭のけもの対面、走り去った。

「ああ、かもしか

「ありや、親と仔だった。

登山基地上高地のすぐ上なのに、岩峰と森林にまもられて、人々から絶縁している別天地、霞沢の山上は「かもしか」の楽園だったのだ。

キョトンと、ちん入者の人間を見た、その意外そうな可愛らしい様子を、私同様生れてはじめて見る動物同志だったかしら。中島さんと二人、お腹をかかえて笑ってしまった。

それからしばらく、登りの岩場がうそのよるな、なだらかな山上を伝って、六百山へかかると、また岩場の降りだ。こちらはまた大きな岩の重り：変化の多い山歩きに、わづか

一日ながら心足りるおもいだった。岩のむすかしさと、「かもしか」の可愛らしさ対象的な印象が忘れられない。

：燕岳のコマクサ：

「コマクサを詩く山男」という随筆を書いたことがある。燕岳へ登って、その砂礫あららしい岩肌、コマクサの種子を蒔いて育て苦しい甲斐あって、三年目ではじめて花が咲いた。

「ほら、見て下さい

Oさんに指されてみると、ここにも、そこにも、うす紅の気品高い花が、緑のレース編の葉を裾にまといっていた。

北アで最初に登った御嶽山は、お雷鳥と共に、お駒草を神から授かった宝としているが、お百草の原料に採り過ぎたとか、山上のコマクサは見られなかった。

穂高や槍、爺、鹿島槍などでも目に入らずに居たから、北アでのコマクサへの初対面はその燕岳だった。

これが一年目ですと指される一葉は、あまりにか細くて、石英粗面岩の砂礫の苔よりも見逃し易い。

「根は深いのですよ

そつと砂礫をかきわけてみると、三センチ、五センチ、十センチもの細い白絹糸の下に、小さい根があった。

激しい風雨の山上に、何の保護もするものもなしに、よくも生き続けられる：その茎や葉がいともデリケートで、その花があまりに優雅に美しいコマクサ：つくんと心打たれた。世間が戦争に入る前の、ざわざわした時代だったから、ひとしおうれし。

しかも、その可憐な花を、猛ましい山男のOさんの蒔き育てる心情のやさしさ：ひろいひろい岩尾根にどこまでも咲かせようとする熱心さ：。

北の燕岳主峰まで迎ると、そこは人のあまり来ぬ処だったから、天然のコマクサがかなり沢山生えていた。もとからある処に詩くO



コマクサ(蓮華色)

さんのやり方は、植物の生態学からいってもまことに合理的だろう。このごろはちとコマクサが流行りすぎ、それまで無かった地に詩く人がある。存外に強いものとみえて、砂礫地なら大体は生えるらしい。そこで生態学者の頭を悩ます現象が、そちこちで起りかけていると聞く。自然の保護の行き過ぎも、また困ったこと：実にむづかしいと痛感する。まるでれんげ畑のように群生しているコマクサに、目をみはったのは戦後すぐの東北岩手山だったが、最近の白馬でも乗鞍でも、また少しづつ見かけるのはうれし。

(日本山岳会会員)

信州植物寸景

横内 斎

(その九)

オオシロガヤツリ *Cyperus nipponicus*
 Franchet et Savatier var. spiralis Ohwi
 かやびりぐさ科 アオガヤツリ 一名 オオ
 タマガヤツリは、一年草で、茎は高さ五〜二
 五cm、葉は細く一〜二・五mm、花は頭状球形
 で小穂を密集する、小穂はやや扁平で数脈が
 ある、果は長さ鱗片の1/2〜2/5で、大体
 倒卵形で断面は三日月形にく、この変種に
 オオシロガヤツリがあり、彼との違いは、小
 穂は扁平でなく、少し稜角があり、鱗片はら
 せん状につく、本品は本州の西南部と四国に
 産し、中国に分布する、これを昨春秋、横内
 文人は長野市田子池で採った、信州では初採
 であるしまた本品の北限でもある、田子池の
 浅い水中に生活し、秋九〜一〇月頃に水が満
 れだすと成長してくる、これによって田子池
 はエゾノミズタデの西限であるのと共に、二
 種の植物の名産地となった。

ヒメモチ *Ilex leucocladia* Makino
 のき科 常緑無毛の小灌木で、枝は長くて太
 くて円い、皮は白色を帯びる、葉は細長い楕
 円形、鋭頭で鈍端、やや革質、葉縁に数個の
 不明の鋸歯がある、長さ八〜一五cm、しばし
 ば粉質を帯びる、花は雌雄異株、白色で葉生
 する、柄はほとんどない、小穂は果時には一
 ・二〜二・二cm、北海道西南部から本州のうち東
 北、北陸、山陰の山地の樹陰に分布する、純
 然たる日本海地域系要素、裏日本要素の一種
 である、本県では、下水内地方の山地には多
 く、下高井北部、上水内北部、北安曇郡川地
 方に産する、内陸に入っては高瀬川流域にみ
 られ、かつて奥原弘人氏は、これを野麦峠に
 得た、ここが本種の南限と思っていた所、私
 共は本年九月初め、木曾南木曾町の田立国有

林中のヒノキ林下で採集した、今の所ここ
 本県における本種の南限だと思われる、ここ
 は有名な田立の滝のある国有林で、本種はこ
 の滝の更に上方で、天然公園と称する湿原が
 ある、この少し下でこの湿原にゆく小径の上
 り道から三〇m程入った左側で、海抜およそ
 一五〇〇m程の所であった。

キソツミ *Viola kisoana* Nakai
 すみれ科 多年生、葉は皆根性、いわゆるすみれ
 科の無茎種、兆葉は披針形で中部以上は離れ
 ている、縁は鋸歯状、葉柄は六〜九cmで割合
 長い、上部はツバサがある、葉柄や脈には細
 毛がある、葉は厚い、卵形〜長楕円形、鈍頭
 で心脚、長さは一〇cm内外に及ぶものがある
 上面は脈に沿うて白球があり、下面は紫色で
 両面共有毛、本種は私がはじめて木曾の棧橋
 の右岸で採り、小泉秀雄先生に知らせたもの
 で、先生は直ちに來會されて、二人で付近を
 探して採集した、ここは今上松営林署の貯木
 場となっていて、以前の面影はなく、その産
 否は不明である、その後これは木曾の大桑や
 田玄でも採られ、他の郡でも採集されている
 (一九二七)

ミドリキタヨシ *Paragnetes communis*
 Triarius form. *flavescens*(Custer) Val-
 Imann
 いね科 多年草で高さ一・五mから
 三mにもなる、葉は線状披針形で、普通のヨ
 シの葉より狭くなくスマートな感じを
 受ける、ヨシよりも外護穎が非常に短かいの
 で区別できる、樺太、本州北部に分布する、
 私の村の虚空蔵山という山の南側の両瀬とい
 う部落の上にもあって採ったことがある、こ
 の変りものに花穂の緑になるものがあるが、
 これがミドリキタヨシで、初め北海道に発見

された、私は七、八年前これを、下水内の秋
 山から帰るトラックのなかで、中洞川の右岸
 の橋ずみにチラと見て、その花穂の異色なの
 におどろいた、
 その翌年九月の初め同地方に行った時、こ
 こで車をとめて採集し、これがそれであるこ
 とを確めた、越後中津川の川筋に点々と産し
 下水内部の各地にも見られる、その後上水
 内の戸隠高原にも見た、飯綱高原の大池の土
 堤外一ヶ所と同郡鬼無里村で確認した、北安
 曇小谷地方にも点々と産する、信州の内部に
 入っては、更級郡大岡村門僧、東筑摩郡明科
 町の東の丘陵、南安曇郡穂高町狐島などに見
 られ、とんで岡谷市川岸の大龍川畔に産する
 ことが、三年前に確認した。これもおそらく
 日本海地域系の要素と考えられる、前記川岸
 は、今の所同種の南限である。

リンナデンコ *Dactylis superbus* L.
 inaeus var. *micropetalus* Lngl
 なでしこ科 カワラナデシコの花一〜二ぐらいの小
 形のもの、花形はエゾカワラナデシコ型であ
 る、信州では古くイワナデシコといひ、埴科
 郡坂城町の岩鼻の岩壁に採られている、私も
 一昨年これを同所に得て、さてこれは正常な
 形であろうか、それとも生態的なものかと思
 いまどったわけである、しかここに生育して
 いるチクマハッカにしてもモイワナズナにし
 ても、皆本来の姿をしている所をみると、本
 種もこのような保水力の少い所に生育して小
 形化し、それが固定したものだと考えられ
 たわけである。

信州におけるタンポポ属の分布 日本産の
 タンポポは、大井次三郎博士によれば二十二
 種となっている、このうち信州には八種の変
 種変形が産する、信州の平地や山地の大部分
 にみられるのは エゾタンポポ *Taraxacu*
m hondense Nakaiで、頭花は黄色で、総
 苞の外片は広い卵形で、瓦をふいたように重
 なり、付属物である小角状の突起はない、本
 州中部以北から北海道に分布している、どち

かといえば寒地性のものである。これの花
 色が淡黄色乃至白色に近いものがある、
 ウスジロタンポポ form. *albiflora* vescaen-
 s H. Koidzumiと云って、更級郡大岡村樺内
 、東筑摩郡本城村西条、同四賀村五常北山、
 諏訪市上諏訪にみつかっている、近頃上水内
 郡南部、長野市山陽でシロバナタンポポとい
 っているのはもとの標本をみないからはき
 りしたことは言えないが、分布上から見て多
 分に、本種のおいがする。また一品この種
 の花色の赤いがある、
 ベニタンポポ form. *rubicundum* H. K
 oidzumiといひ花が半開性である、東筑摩郡
 四賀村の山中、木曾奈良井川溪谷、小県郡菅
 平高原などにみつかっている。
 カンセイタンポポ(一名カンサイタンポポ)
Taraxacum japonicum Koidzumiは関
 西系即ち西日本の暖地地域にその分布の本拠
 をおくもので、頭花は割合小さく黄色で、総
 苞の外片は開出しなない、付属物の小角突起は
 ごく小さいか又はなない、信州では木曾谷の南
 部今の南木曾町の地域を主とし、一部上松町
 までみられる、本種の分布は近畿以西、四国
 、九州、琉球である。

お願い 「山と博物館」の購読者をつのって
 おります。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博
 物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明
 柿 撮影 伊藤 藤一 武

山と博物館 第12巻第10号
 一九六七年十月二十五日発行
 発行所 長野県大町市T.E.L.(大町)二二一
 大町山岳博物館
 印刷所 大町市下仲町
 大糸タイムス印刷部
 定価 年額 三〇〇円(送料共)